



創立50周年を祝賀



東洋哲学研究所の創立50年の記念の年を祝福し、慶賀申し上げます。

貴研究所と、その機関誌『東洋学術研究』は、創立

学の探究に触発されたものであるにせよ、東洋哲学研究所はそれだけでなく、私たちの社会の変化する性質について、シンポジウムや出版物を通して、学際的な

考察を進めているのです。

時代と世界に「開かれた」研究所

カレル・ドベラーレ

1987年の

「世俗性と宗

者・池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長が示した『研究と対話』という指針を、見事に実現してこられました。

研究所の主な活動としては「法華経の研究」「平和・環境・人類と女性の権利・倫理的問題群など世界的課題の解決を促進する宗教間対話」、そして「現代についての研究」が挙げられます。その研究活動は、仏教哲

教」についての取り組みでした。

※同年、『*The Journal of Oriental Studies*（『東洋学術研究』英語版）創刊号で「世俗性と宗教の二分法を超えて」を特集。ドベラーレ氏は「世俗性と宗教——方法論的提言」を寄せた。同論文の邦訳は同年の『東洋学術研究』第26巻第1号に掲載された。

社会科学に対する関心は、東洋哲学研究所のアプロ

ーチの典型的なものです。自分たちの教義的思索に社会科学の知見を組み入れることを拒否するような宗教もあります。東洋哲学研究所のアプローチは、彼らのための模範といえるかもしれません。

社会科学に対する開放性はまた、非仏教的背景をもつ社会のなかでSGIを発展させることを助けました。SGIは、その宗教儀礼や組織構造をアメリカやヨーロッパの文化に適応させ、いくつかの他の宗教のように全世界均一の構造を押しつけたりはしませんでした。

今後とも、東洋哲学研究所の研究員が、宗教に関する社会科学の学術会議に積極的に参加することは、研究所をさらに世界へと開かれたものとし、その科学的探究をより向上させていくにちがいないと思います。

(Karel Dobbelare／国際宗教社会学会名誉会長)



1961年2月4日、釈尊成道の地ブツダガヤを訪れた33歳の創立者（左）